

特色ある学校

基礎・基本の中にある 発展性を大切にする学校を目指して

福岡県立八女工業高等学校長 梶 孝洋

1. はじめに

本校は大正9年福岡県で3番目の県立工業学校（設置学科：機械科，電気科，採鉱科）として発足した。当時農業主体の筑後地区であったが，地域の近代化とともに工業振興とその技術者養成が必要であるとの世論が県議会で取り上げられ，ここ筑後地区に工業教育の学灯がともされた。開校以来，設置学科は幾多の変遷を経て，現在6学科6学級（電子機械科，自動車科，電気科，情報技術科，土木科，工業化学科）の全日制工業高校となり，平成22年度に創立90周年を迎えている。これまで23000有余の卒業生を出しており，地域は勿論のこと国内外で多くの卒業生が技術者として活躍している。本校では，校訓である「誠実 勤勉 協調」を軸に，基礎・基本の習得を重視した工業教育を実践している。

2. 本校の現状

本校は親子，兄弟で入学する生徒が多い高校であり，地域の中学生在がぜひ入学したい高校，そして保護者が入学させたい高校である。本校の特色を敢えて言うならば，基礎・基本を徹底

して指導し，地域や保護者からの信頼を受け，「知・徳・体」のバランスのとれた工業教育を目指してきたことである。これが生徒の力を伸ばし，自信と誇りを培い，希望する進路の実現に繋がっている。「当たり前のことがきちっとできる」生徒を育成することが本校の伝統である。

(1) 基本的生活習慣の育成

本校は遅刻欠席が非常に少なく，毎年ほぼ60%の生徒が皆勤者（無欠席，無遅刻，無欠課，無早退）として表彰される。学年・学科・生徒指導部・家庭が密に連携し，常に進路を意識した指導を行い，皆勤を逃した生徒も欠席日数は非常に少なく，気力・体力が充実した生徒も多い。服装・挨拶についても，正門での挨拶指導，日常の身だしなみの指導を通して，端正な服装を心がけさせ，日本一の挨拶ができる八女工業高校生を目指して日々の指導を徹底している。またPTAと連携し，毎月3日間の1年生保護者による挨拶運動・授業参観を行っている。また三者面談や地域懇談会を通して，本校の教育活動を理解いただいていることも，この実績の要因かもしれない。「工業高校は社会に近い高校である」ことを念頭に置いた教育を実践するとき，基本的生活習慣の育成は家庭との連携をとり，最も大切にしなければならないことである。

(2) 正課授業・課外補習と部活動との両立

生徒たちの学びが目指すところは，自ら学ぶ



力を身につけることである。このことは正課授業に対する姿勢だけでなく、後に述べる資格取得のための学習も大事な役割を果たしている。また本校は部活動が大変盛んで、部活動加入率も85%を超えている。インターハイに毎年出場している陸上部を始め、多くの部活動が県大会に出場している。正課授業を重視しつつ、資格試験、就職、進学、公務員受験のための課外補習と部活動を両立させるため、「朝は資格取得等の課外補習優先、放課後は部活動優先」という原則を決めている。その結果多くの部活動生は学習との両立をめざして、正課授業・課外補習に集中して取り組み、放課後は、思う存分部活動に取り組み、気力・体力そして豊かな人間性を培っている。また各学科では創造力や課題解決力を育成するため、専門分野に即した研究部があり、ものづくりコンテスト、ロボット競技大会、エコデンレース等の全国大会をめざして日々活動している。

(3) 資格取得指導 ジュニアマイスター認定に向けて

ジュニアマイスター顕彰制度が始まるまで、資格取得は各学科主体の取組として積極的に行われてはいたが、学校を挙げてという意識の点では希薄な状態であった。この状況に変化が現れたのは、ジュニアマイスター顕彰が始まって以降のことである。各学科にジュニアマイスターという目標が新たに加わり、全校でこれに取り組むという一体感が芽生えた。

現在は普通科の先生方の協力も一層強化され、学科独自の取組から学校を挙げての取組にと姿を変えつつある。

平成16年度に初めて本校として取り組むジュニアマイスターの数値目標を定めている。初年度の目標は50名であったが、各学科の目標は特に定めていない。その後19年度までは60名(各学科10名)を目標として取り組んできた。その後目標を高め、平成22年度は120名(各学

科 年度	電子 機械	自動 車	電気	情報 技術	土木	工業 化学	全体
平成20年度	24	29	10	27	5	6	101
平成21年度	22	41	8	30	3	27	141
平成22年度	61	39	24	22	19	32	197
平成23年度	33	28	24	23	17	30	155

表1 年度別ジュニアマイスター認定数

科20名)を目標に取り組み、前期・後期の申請を合わせると197名に達している。平成23年度の目標は同じく120名であるが、前期・後期を合わせると155名となっている。

各年度いずれも当初の目標を超えてきている。これは受検種類の増加や指導の充実による成果でもある。また漢字検定やリスニング英検、工業英検など普通科教員の強力な指導や危険物取扱者・ボイラー技士など学科の枠を超えた指導も活発になってきている。この背景に、ジュニアマイスター顕彰制度の存在がある。この制度が資格・検定に挑戦する生徒の裾野を広げ、生徒に意欲的に取り組む目標を与えるという効果をもたらしている。

また国家技能検定試験にも積極的に参加させ、技能士の育成を行っている。平成23年度は成績優秀者として一般企業の受検者にまじり7名の生徒が県知事賞や県職業能力開発協会賞を受賞している。技能検定は、職種において、各学科の学習内容と一致あるいはその延長線上に位置するものもあり、授業の教材として位置づけて今後はクラス全員で取り組む計画を立てている学科も出てきている。

本校がジュニアマイスターの目標を掲げたことの成果としては、認定者が増加したこともさることながら、それ以降のさまざまな取組に弾みがついたことがあげられる。また教師側にも指導方法の工夫改善が進み、資格取得に対する取組が活発化し、生徒の意欲をさらに高める結果となっている。

平成23年度、ジュニアマイスター前期申請数は4年連続前期全国第1位となり、福岡県教育文化表彰を受けている。

(4) 進路指導

① 就職状況

地域から「就職するなら八女工業へ」との評価をいただいている。これまで多くの人材を国内有力企業に送り出し、複数の求人をいただくほど企業からの高い評価を得ている。昨年度の就職先は県内45%、県外55%となっている。八女工業高校が多くの田園地帯を抱える筑後地区に設置された目的からして、本校の就職指導やその成果は地域社会から期待されており、本校に託された使命となっている。進路指導部や学科を中心に企業訪問や就職試験に向けての学力補充・面接指導を精力的に行っている。また就職後、企業を代表して技能五輪大会に出場し、国際大会で活躍する卒業生もいる。平成23年のロンドン大会において、移動式ロボット職種で銀賞をとっており、本校に対する期待も大きい。

② 進学状況

教育課程上、大学進学希望者に対して2・3年生には数学B・英語Ⅱ、数学Ⅲ・物理Ⅰ・英語Ⅱを選択科目として設け、早朝補習や土曜セミナーと連携して進学のための学力養成に努めている。入学当初は就職を目標としている生徒が大多数であるが、より高い目標の実現に向け、進学補習体制やガイダンス機能の強化など進学指導体制の充実・強化を図っている。

③ 公務員

本校の進路を他校と比べてみると、特徴的なものとして、公務員志望が多いことがあげられる。平成7年からの卒業時の資料によると、土木科の技術系公務員を中心として474名の卒業生を出している。土木科は技術系公務員志向が高い生徒の入学が多く、1年時の進路希望調査では、ほとんどが公務員希望である。公共事業予算の削減等、厳しい状況になってはいるが、

公務員は学科の特色ある進路先であるとともに、地域の信頼を得てきた重要な進路先である。本校の進路先の一つの柱として、公務員進路説明会や2年生より開始する公務員早朝補習、土曜セミナーの充実を図り、進路指導部や土木科をはじめとする各学科の総力を挙げて、一人でも多くの合格者を出すよう努めている。

(5) 伝統を伝えるために 九重教育キャンプ

福岡県では入学後の1年生に対して、多様な体験活動を通して、生徒の克己心を育成し、たくましい生徒の育成を図ることを目的として、克己心育成のための宿泊体験事業が実施されている。多くの学校では施設を利用して本事業を実施しているが、本校ではこの事業が実施される前から、生徒相互の連帯感や友情、信頼感を育むことを目的として、昭和45年平原野営訓練所での2泊3日の教育キャンプから始まり、1年生の恒例行事として実施されてきた。また生徒用テント、炊飯道具その他必要物品を卒業記念品として寄贈を受け、装備も年々充実され、本校の伝統的学校行事になっている。

開始当時の古き良き時代を支えた工業高校生の質実剛健の精神と教職員の熱い思いは脈々と受け継がれており、新年度をむかえると、まず引率教員のテント設営研修を振り出しに、運動場での新入生に対する設営訓練をはじめ、各種の事前指導がなされる。この伝統的な行事をさらに充実させていくため、職員のこの行事に対する確かな位置づけと、年度で変わる担当職員を支える支援チームの組織づくりに努力していきたい。毎年、新入生は真の八工生への架け橋を渡するため、九重高原に向け出発している。

(6) 本物の技術に触れる取組





① 産学官連携産業人材育成事業

福岡県で平成21年度から産学官連携のものづくり人材育成事業に始まり、平成22年度から上記名称のもと、以下の取組を行っている。

- ・インターンシップ
- ・高度熟練者による実践的実習指導
- ・教員等の企業における技術研修
- ・学級単位の企業訪問
- ・企業・大学等との共同調査研究

外部の優秀な高度熟練者・技術者を招聘しての実習指導や教員の企業での技術研修は年々充実してきている。また大学と連携して、創造力や技術的思考力の育成をねらいとして「次世代自動車デザインの研究開発」「3次元CADとメカニカルデザインに関する研究」をテーマに地元大学の先生方に指導をいただいております。自動車科の生徒が本校を代表し、県の成果発表会で研究発表を行っている。

② 本校独自の取組

・県の事業とは別に、電子機械科では、ものづくりコンテスト旋盤部門の全国大会を目指し、高い技術力だけでなく、「プラスαの何か」をもとめて、同窓会の支援をいただき、県外の優れた高度熟練者を招聘して、旋盤技術講習会を開催し、生徒とともに教員も学んでいる。

・自動車科では、スーパー GT3000のレーシングチームを招聘し、フェラーリ430 GTを前に、最新のメカニズムやレースにおけるピットの役割等について学習し、生徒の自動車に関する興味関心を高めている。

3. おわりに

本校はこれまで教育の不易の部分を大切に、



教職員が一丸となって基礎・基本の徹底を図り、「知・徳・体」のバランスのとれた教育を目指してきた。またジュニアマイスター顕彰を活用して、積極的に資格取得に取り組む生徒を育成し、「自ら学ぶ力」を育ててきたことも本校の特徴である。

今後は教育の柱の一つに、課題研究をはじめとする「ものづくり教育」の充実を図り、課題解決能力や創造力そしてコミュニケーション能力を育成する取組を加えたいものである。

「課題研究」は工業の各科目の枠を超えた工業教育の集大成といえる科目である。常に教員が生徒と取り組む課題を模索し、十分な準備を行った上で、指導していく課題研究は、生徒そして教員を育てていく「ものづくり教育」の大きな柱である。工業教育を行う教員は教育者であるとともに、技術者でありたいと思うことも必要ではないだろうか。工業教育の中で夢を語り、その夢を生徒と共有し、夢を実現する教育を行ってこそ、生徒自身が夢を持ち、自らの夢を実現させるために行動できるようになると考える。これからの取組が、国際競争の激化、産業構造の変化や技術革新等、生徒たちが進んでいく厳しい技術社会において、たくましく生きていくことのできる生徒の育成につながるものと期待している。

最後に、本校工業教育の成果をもとに、さまざまな広報活動を通して、地域の小中学生や保護者に、工業教育の素晴らしさや生徒たちの成長を伝えとともに、地域からさらに信頼され愛される工業高校を目指し、日々の教育活動に邁進していきたい。